



自作した「ばりうま牛乳」パックを手にする大坂聡志さん

機 洗ひん

▽：神奈川県にある横浜市立神橋小学校5年生の大坂聡志さんは「牛乳の大切さを発信していきたい」と意気込む。Jミルクがこのほど都内で開いた学術研究会「ジャパンミルクコンGRESS2025」で特別講演を行い、牛乳にまつわる自主研究を披露した。同校の生徒を対象に「いつ牛乳を飲むか」「飲みたい牛乳パック」をたずねるアンケートを行った経験にふれ結果を報告した。

▽：大坂さんは1000種にもおよぶ牛乳パックを保有している。群馬県のスーパーで偶然「みんなの給食牛乳1000ミッド」を見つけ「学校で飲んでいる牛乳も地域ごとにさまざま」だと気がついた。探求心に火がつき、旅行先でスーパーを訪れては牛乳パックを収集した。

▽：アンケートでは、学校給食以外で牛乳を飲まない生徒が約27%に達した。大好きな牛乳の魅力や大切さをどうしたら発信できるのか。心がけたのは「身近なところから根気よく始める」ことだ。

▽：お気に入りの牛乳パックを複数選び、自校生徒90人を対象に人気投票を実施。一番人気となったパックの色や文字デザインを変えつつ投票を続けてもらい、生徒が最も飲みたいと思う「ばりうま牛乳」(最強牛乳)パックを自作した。

▽：この経験から「牛乳パックのインパクトが必要。例えば栄養面の効果が目分で分かる」といいと提案した。

▽：大坂さんは給食で余った牛乳量の計測を1年以上、続けている。夏季には「熱中症対策におすすめ」と記載したポスターを貼り出し、一時的に飲み残しの量が減ったこともある。「小さなことを積み上げ、一人でも多くの人に牛乳を飲んでもらいたい」と結んだ。